

カリキュラムとGraduation Policy (GP) との相互依存関係一覧表

記入者名	連合獣医学研究科 音井威重
記入年月日	H19. 7. 30
学部・研究科名	連合獣医学研究科
学科・専攻等名	獣医学専攻
コース等名	

学部・研究科の教育目的（具体的に記述・箇条書き）		学科・専攻科等の教育目的（具体的に記述・箇条書き）				
学科・研究科等のカリキュラム		学科・研究科等のGraduation Policy (GP) (◎=GP達成のために、特に重要)				
授業科目名	授業科目の主題（箇条書き） （この授業科目における中心となる題目・問題・テーマ等を箇条書きに記入する。）	授業科目の到達目標（箇条書き） （この授業科目の学習後に到達すべき最低限の（行動）目標を学生が主語で行為動詞を使用して箇条書きに記入する。）	A. 獣医学（動物）に関する最先端の科学技術の習得、あるいはそれらへの対応能力を養う。	B. 生命の科学的理解と論理的思考に基づき、高度専門家あるいは研究者として、自ら問題意識を持ち、獣医学を取り巻く諸問題に対応または解決出来得る能力を養う。	C. 獣医学・医療分野で研究の国際化に対応出来得る、実践的な英語およびコミュニケーション能力を養う。	D. 社会で活躍できるリーダーとしての能力を養う。
基礎獣医学特別講義 I（鈴木秀作）	動物の血管作動物質の機能形態学的な知識について理解を深めてもらう。	動物のもつ生物学的特性を示し、さらに各器官の組織構造上の相違と機能の関連性について最新の情報を理解する。中でも新規の生理活性物質の機能形態についても理解する。	◎	○	△	△
基礎獣医学特別講義 I（上原正人）	神経系に関する発生学的、形態学的な知識について理解を深めてもらう。		◎	○	△	△
基礎獣医学特別講義 I（太田康彦）	実験動物における器官形成及び腫瘍発生機構に関する実験形態学的な知識について理解を深めてもらう。	実験動物の取り扱い、管理についての基本的事項ならびに実験動物を用いた研究方法、手技、実施計画法を理解し、この領域における問題解決に対する能力を高度化する。さらに、実験動物を用いたの研究を目指す学生、あるいは既にその業務にある学生のみならず、医学、獣医学領域の新しい機材、薬剤の開発にもなう動物実験を実施している企業をめざす、あるいは既に企業に就職している学生は最新の知識を理解する。	◎	○	△	△
基礎獣医学特別講義 I（村上隆之）	動物の心臓・血管・リンパ管の正常形態、発生及び発生異常等の肉眼的、光学顕微鏡的、電子顕微鏡的の追求についての研究	脈管系の正常および異常形態	◎	○	△	△
基礎獣医学特別講義 I（那須哲夫）	鳥類の脈管系の発生学的比較解剖学的研究	この授業の目的は博士課程の学生が形態学における基礎的な知識を習得することにある。鳥類における血管の詳細な形態、走行を肉眼的、電顕的な面から講義し、哺乳類のそれと比較することにより、大学院学生に血管の発生を理解させようとするものである。	◎	○	△	△
基礎獣医学特別講義 I（木曾康郎）	母子境界領域における免疫応答に関する機能形態学的研究	この授業の目的は、細胞組織化学における最新の情報を大学院生に提供することであり、この領域に対する学生の理解力と応用力を高度化することにある。	◎	○	△	△
基礎獣医学特別講義 I（本道栄一）	哺乳類胚の着床に関する分子生物学的研究に基づく講義	1. 子孫を残す原理を概説し、個人の生物観を養う。 2. 具体的には、配偶子形成の機構、接合後の胚形成、生殖周期、有胎盤類における妊娠の維持までを理解させる。 3. 高等脊椎動物に限らず、脊椎動物全般、無脊椎動物についても概説する。	◎	○	△	△

基礎獣医学特別講義Ⅱ (岡 達三)	高等動物における細胞内代謝が生理活性物質や栄養素によって制御される機構を分子レベルで解明する研究	この講義の目的は、「分子生理学」を深く学ぼうとする学生に高等動物の細胞内代謝、発生・分化の分子制御ならびに遺伝子発現の栄養制御に関する最新の情報を教授することである。	◎	○	△	△
基礎獣医学特別講義Ⅱ (澁谷 泉)	神経細胞、神経内分泌細胞、内分泌細胞の機能調節機構に関する研究		◎	○	△	△
基礎獣医学特別講義Ⅱ (村上 昇)	哺乳類と鳥類の生体リズム機構、摂食機構、および生殖機構に関する研究	本授業の目的は大学院生にさらに高度な生殖生理学の知識を教授することにある。生殖学は獣医の基礎科学あるいは臨床分野で大変重要なものであり、それ故、本講義では生殖に対する中枢性、末梢性、環境性あるいは栄養性の制御に関する最新の情報を提供したい。それらの中には遺伝子操作、アポトーシス、DNAのメチル化と発生など興味深いトピックが含まれている。	◎	○	△	△
基礎獣医学特別講義Ⅱ (和田直己)	脊椎動物の運動の統合神経制御の運動学、筋電図学、神経生理学、神経解剖学的、生化学的方法を用いた研究	この授業の目的は動物の動物たる所以である動くこと(Locomotion)のハードとソフトを理解することによって動物、特に脊椎動物自体を理解することを目的とする。脊椎動物、つまり脊柱を持つ動物の歴史は約4億年前のカンブリア紀に始まったと考えられている。脊索動物が魚類になって遊泳運動を高度に発達させた。その魚類の中から水底生活に適応するために鰭を肢にかえたものが現れ、この中から陸上に這い上がり、陸上を4肢で歩きだした。両生類、爬虫類と陸上での歩行を発達させ、哺乳類(4足哺乳類)ではgallopingという最も高速で陸上を移動できる歩行を獲得した。そして700万年に樹上生活を営んでいた哺乳類のなかから2足直立歩行をはじめた我々人類が生まれたと考えられている。このように脊椎動物の進化の過程はlocomotionの進化でもある。Locomotionは動物の種類によって異なり、動物の種類を特徴付ける。ka体のすべての器官はその動物のlocomotionに対応しており、またlocomotionは体を変化させる。つまりlocomotionを理解することが動物自体を理解することといってもよい。本講義はlocomotionのソフトつまり神経制御を中心に進めていき動物の生のメカニズムの根本を理解することを目的とする。	◎	○	△	△
基礎獣医学特別講義Ⅲ (宮本 篤)	薬物の作用機序に関する比較薬理学的研究	この講義の目的は、「獣医薬理学」の中でも、特に心臓血管分野で深く学ぼうとする学生に対して関連する最新の情報を教授することである。特に薬物受容体と情報伝達はその中心となる。薬物に対する反応性の動物種差についても触れる。	◎	○	△	△
基礎獣医学特別講義Ⅲ (佐藤 宏)	薬物および食物を含む種々の要因により惹起される消化器疾患に関する薬理学的研究	薬の作用(特に副作用)は通常、健全な動物を用いて評価されている。しかし薬は本来病気の動物(ヒト)に使用されるものであり、その作用は健常時と異なることが予想される。また獣医医療では多くの動物種を対象としているが、薬の中には動物種によりその作用が大きく異なるものもある。この授業ではまず病態動物での薬の使用に関する基本的な考え方を概説し、ついで各種疾患に使用されている代表的な薬物について動物種差を含めて使用上の問題点を概説する。授業を通じて院生が各種病態の動物における薬の適切な使用方法について修得するのが目的である。	◎	○	△	△

<p>基礎獣医学特別講義Ⅲ (山野好章)</p>	<p>内分泌攪乱物質が哺乳類の精子形成機構に与える影響</p>	<p>この授業の目的は最新の生化学、分子生物学手法を用いて解明されてきた動物の生命現象を大学院生に提供することであり、この領域における問題解決能力を学生に与えることにある。この授業は獣医学基礎研究を目指す学生、既にその業務に従事している学生のみならず、獣医学臨床に必要な診断薬、治療薬はもとより栄養食品などの開発をしている企業をめざす、あるいは既に企業に就職している学生を対象としている。以上の目的のために、本講義では最新の研究成果に基づき、生化学、分子生物学研究の手法、問題解決法、研究成果の評価について講述すると共に受講学生に対して最新の獣医生化学を学び取る機会を与えることをめざしている。</p>	<p>◎</p>	<p>○</p>	<p>△</p>	<p>△</p>
<p>基礎獣医学特別講義Ⅲ (伊藤勝昭)</p>	<p>薬物をはじめとする生理活性物質の細胞レベル、すなわち細胞膜や細胞内小器官への作用機序の解明についての研究</p>	<p>この授業の目的は学生が博士論文研究を行うのに必要な基本的な専門知識を習得することにある。そのために生体のホメオスタシスおよびその破綻である病気メカニズムに関わる生体内分子の機能を概説し、ホメオスタシスを回復させる薬物の作用の細胞レベルおよび分子レベルでの作用メカニズムを講義する。</p>	<p>◎</p>	<p>○</p>	<p>△</p>	<p>△</p>
<p>基礎獣医学特別講義Ⅲ (那須哲之)</p>	<p>薬物による内臓平滑筋の反応の作用機構の解析</p>	<p>化学物質は細胞に備わっている情報伝達系を介して細胞に情報を伝達する。生理活性物質は一般には細胞膜表面にある受容体に結合して情報を伝えるが、ステロイドホルモンのように核内の受容体に結合するものがある。生理活性物質が細胞膜の受容体に結合するとGTP結合蛋白質を介しフォスホリパーゼCを活性化しIP3とジアシルグリセロールを産生し情報をさらに内部に伝える。化学物質が受容体に結合した後の細胞内の情報伝達系と細胞のイオンチャンネルの変化を知ることが薬物反応の理解に重要である。</p>	<p>◎</p>	<p>○</p>	<p>△</p>	<p>△</p>
<p>病態・予防獣医学特別講義Ⅰ (高瀬公三)</p>	<p>家畜・家禽、野生動物が保有するウイルス、細菌の病原学的意義、およびその免疫に関する研究</p>	<p>この講義の目的は、「獣医伝染病学」を深く学ぼうとする学生に動物の感染症、特に鳥の疾病を取り上げながら、その病原体の分離、培養、同定、型別、遺伝子解析および予防対策に関する最新の情報を教授することである。中でも呼吸器および腸管に感染するウイルスを中心に取り上げ、またワクチンについても触れる。</p>	<p>◎</p>	<p>○</p>	<p>△</p>	<p>△</p>
<p>病態・予防獣医学特別講義Ⅰ (村瀬敏之)</p>	<p>この授業では、病原微生物学、とくに細菌感染症の起原菌、病原因子、疫学及び感染予防対策に関する最新のテーマ(話題)について講義する。近年の細菌学研究の進展により、分類体系の見直し、環境中の培養不能な状態の菌の存在、病原性の発現機序、薬剤耐性機構及び薬剤耐性遺伝子の伝達等に関する重要な発見がなされている。このような細菌学に関する最新の知見を紹介し、今後の細菌感染症について論考する。</p>	<p>細菌の分類体系、分離法、型別法、病原性の発現機序、薬剤耐性機構及び薬剤耐性遺伝子の伝達等に関する最新の知見を習得する。</p>	<p>◎</p>	<p>○</p>	<p>△</p>	<p>△</p>
<p>病態・予防獣医学特別講義Ⅰ (後藤義孝)</p>	<p>感染症の制御を目指した感染性病原体ならびに宿主の分子生物学的・免疫学的研究</p>	<p>この講義は大学院学生に感染症におけるさまざまな病態を深く理解させるとともに感染症のさまざまな分野における科学的諸問題を解決するための能力を開発することを目的とする。ここでは抗酸菌を素材として取り上げ、動物宿主にみられる自然抵抗性ならびに獲得抵抗性の機序に焦点をあて、いまや必須となった分子遺伝学的手法をはじめ最新技術によって解明された感染防御に関わる分子機構について最新の知見を紹介する。</p>	<p>◎</p>	<p>○</p>	<p>△</p>	<p>△</p>

<p>病態・予防獣医学特別講義Ⅰ（甲斐一成）</p>	<p>自ら開発した遺伝子導入システムを用いた種々のウイルスの病原性解析や新治療法の研究</p>	<p>この授業の目的はレトロウイルスを中心にした病原性動物ウイルス研究についての最新の情報を大学院生に提供することであり、この領域にたいす問題解決に対する学生の能力を高度化することにある。この授業の目的として、レトロウイルスの各遺伝子領域と病原性との関連、ウイルス遺伝子の機能解析を主眼にして、その発展としてのウイルスベクターの性質等について講義し、病原性ウイルスの病原性関連遺伝子の特定、病原性の変化とウイルス遺伝子の変化について考究を深める。結果としてワクチン開発等、獣医学のための新しい材料や器材の開発をめざす学生に対しても最新の知識を教授することにある。</p>	<p>◎</p>	<p>○</p>	<p>△</p>	<p>△</p>
<p>病態・予防獣医学特別講義Ⅰ（前田健）</p>	<p>獣医感染症の病態解析とその制御</p>	<p>病原微生物と自然宿主との共存関係を正しく理解し、感染症の病態発現機序、およびその予防・治療法を学ぶことを目的とする。</p>	<p>◎</p>	<p>○</p>	<p>△</p>	<p>△</p>
<p>病態・予防獣医学特別講義Ⅱ（安田直敏）</p>	<p>野生動物における各種疾病の本質を形態学および機能的面から究明し、比較を行う分野の研究</p>	<p>野生動物および家畜の腫瘍・寄生虫病を対象とし、その発生、原因、そのために生じた形態学的変化、機能的障害について論じ、人体における同様な疾病との比較をしながら病態の理解を高め、それぞれの疾病の特徴、問題点について講義する。</p>	<p>◎</p>	<p>○</p>	<p>△</p>	<p>△</p>
<p>病態・予防獣医学特別講義Ⅱ（島田章則）</p>	<p>大気中の浮遊粒子状物質の呼吸器毒性についての病理学的研究</p>	<p>病気の原因は、外因（物理的、化学的、生物学的）および内因（性差、年齢、遺伝子異常など）に分けることができる。外因は健康な個体の身近なところ、すなわち、水、空気、食物などの諸環境中に存在する。病気をもたらす因子は、個体に侵入すると、遺伝子—高分子—細胞—組織—臓器—循環器系や神経系などの系—個体全体などさまざまなレベルで接点を持ち影響をおよぼす。本講義では、病因としての環境内諸因子と個体が備えた防御系（免疫や防御蛋白）のインターアクション、恒常性破綻・病気発生のメカニズムについて学習する。</p>	<p>◎</p>	<p>○</p>	<p>△</p>	<p>△</p>
<p>病態・予防獣医学特別講義Ⅱ（森田剛仁）</p>	<p>動物の様々な神経疾患に関する病理学的研究</p>	<p>この授業の目的は、動物の脳、脊髄、末梢神経並びに眼球（網膜および視神経）を含む神経系の疾患の臨床症状、病態生理および病理像を最新の知見も含めて大学院生に提供することであり、同時にヒトの同様の神経系疾患についても概説し、比較病理学の見地から動物の神経系疾患について説明する。本授業は専攻学生に対して最新の獣医神経病理学を学び取る必要性に答えるものである。</p>	<p>◎</p>	<p>○</p>	<p>△</p>	<p>△</p>
<p>病態・予防獣医学特別講義Ⅱ（山口良二）</p>	<p>動物の感染症について生体側の反応因子と病原体側の病原性因子についての研究</p>	<p>この授業の目的は大学院生に対して感染病理学について理解してもらうために動物感染症を総合的に教授する。感染症の原因になる多くの病原体があり、感染によって発症するために微生物側の毒力と宿主の免疫機構などのかかわりが重要である。最近の研究技術の進歩により、病理学も形態だけでなく、組織培養、分子生物学や免疫組織学的その他技術の導入も重要になってきた。これらの技術の紹介とともに、病理学の総論、感染症の成立、発症機序、生体防御、さらに、現在の話題となっている感染症について、病原体、診断法や病理学的所見について講述していく。これらの技術は小動物、産業動物、実験動物等に携わる研究者、獣医師の感染性疾患に対して考察することの礎となる。</p>	<p>◎</p>	<p>○</p>	<p>△</p>	<p>△</p>

病態・予防獣医学特別講義Ⅱ（林俊春）	動物がどのようにして自己と非自己を識別しているかという問題が免疫学における中心課題である。動物は様々な外来性異物に対して反応し、それらを排除する。これが生体防御すなわち免疫である（液性および細胞性免疫）。一方免疫抑制（寛容）機序が免疫反応に関与する事が明らかとなってきた。そこで、免疫寛容破綻の機序について解説し、それらの知見がどのように予防や治療に応用可能であるかについて講義する。	免疫寛容破綻の機序の理解。	◎	○	△	△
病態・予防獣医学特別講義Ⅱ（井上誠）	小動物における腫瘍発生についての分子生物学的および免疫組織化学的研究	本講義の目的は小動物と人の腫瘍発生・悪性化の機構における分子遺伝子レベルの変化についての最新情報を大学院生に提供することであり、この領域にたいする問題解決に対する院生の能力を高度化することにある。本講義では、獣医病理学並びに小動物臨床医を目指す学生、また医薬品企業において実験病理学にたずさわっている学生に対して最新の知識を教授する。	◎	○	△	△
病態・予防獣医学特別講義Ⅲ（岡本嘉六）		この講義の目的は、個人または集団の健康に関するデータの収集、解析および解釈に必要な疫学手法の学習の手助けとなり、ならびに、個人または集団の健康管理について指示を出す際の実証的医療の支えとなる情報に基づく意思決定に必要な骨組みを提供することにある。	◎	○	△	△
病態・予防獣医学特別講義Ⅲ（伊藤壽啓）	人獣共通感染症病原体の生態、遺伝子進化、宿主域制限因子及び病原性決定因子の究明並びにその予防・制圧に関する研究	この授業では地球上に存在する様々な動物由来感染症について、その公衆衛生上の重要性を生態学および環境学的側面から理解し、実際に感染症の発生時に様々な方面から対応可能な知識を習得することを目的とする。とくに近年我が国で問題となっている人獣共通感染症についてその発生状況ならびに防遏・予防対策について詳細に解説するとともに、現時点での防疫上の問題点等について考察する。	◎	○	△	△
病態・予防獣医学特別講義Ⅲ（小野悦郎）	動物の感染症に対する新規感染防御方法の開発研究	この授業の目的は、最新の感染防御方法に関する情報を大学院生に提供することであり、感染症の制御方法に対する大学院生の開発能力を高度化することにある。	◎	○	△	△
病態・予防獣医学特別講義Ⅲ（永友寛司）	産業動物に多発する感染性疾患の病原体検索、早期診断法の開発、感染予防法の確立についての研究	この講義では、（１）家畜防疫に関する行政、（２）国内外の動物の各種疾病の防疫政策の現状、（３）実際の畜産フィールドでの問題などについて講義し、共に考察する。	◎	○	△	△
病態・予防獣医学特別講義Ⅲ（末吉益雄）	動物疾病の診断、治療、予防に関する研究	この講義では、（１）動物と環境、（２）動物の感染症（ウイルス、細菌、真菌、寄生虫）、（３）動物の管理衛生などについて講義する。	◎	○	△	△
病態・予防獣医学特別講義Ⅲ（近藤房生）	生産から最終的に人に消費されるまでのすべての段階で、食品の安全生、健全性、完全性についての研究	近年消費者の「食の安全・安心」への要求が強まっている。食品衛生行政は、国および地方公共団体とも根拠法令に立脚して行われることから、必然的に食品衛生関連法令が見直され年々厳しい条文の追加や改正がされてきている。この授業の目的は、最新の改正点を含む主な関係法令を通じて、事例を交えて法令が有機的に結びついて現実的にどの様に実施されているかを基本的に理解し、さらにそれに留まらずどの様な問題点・改善点が存在するかを積極的に自ら考える力を養い、将来の食品衛生分野の単なる実務者としてのみならず、より新しく有益な提案ができる指導的実務者にふさわしい能力を身につけることにある。	◎	○	△	△

<p>病態・予防獣医学特別講義Ⅲ（岩田祐之）</p>	<p>家畜の免疫学的機能評価のためのサイトカイン・免疫担当細胞についての分子生物学的および細胞免疫学的研究</p>	<p>感染症および過敏症を中心に最近の知見について講義する。特に、感染症における免疫防御機構を免疫応答に重要な役割を担う抗原提示細胞（マクロファージ、樹状細胞など）、ヘルパーT細胞サブセットの発現・機能を中心に解説する。また、過敏症の発生メカニズムについて概説する。</p>	<p>◎</p>	<p>○</p>	<p>△</p>	<p>△</p>
<p>臨床獣医学特別講義Ⅰ（出口栄三郎）</p>	<p>獣医臨床分野における内科疾患やストレスと神経系・内分泌系・免疫系の相互作用を解明し疾病予防法について研究する</p>	<p>この講義の目的は、「病態免疫学」を深く学ぶとする学生に、特に豚における生産獣医療に関する最新の情報を教授することである。我が国および日本における生産システム、生産を阻害する飼養管理上のストレスと免疫機能の低下、それと関連する豚における主要疾病とその予防法について講義する。</p>	<p>◎</p>	<p>○</p>	<p>△</p>	<p>△</p>
<p>臨床獣医学特別講義Ⅰ（高木光博）</p>	<p>産業動物を対象として、生産性を阻害する主要な疾患の病態解明とその予防法の開発</p>	<p>この講義の目的は、「産業動物獣医学」を深く学ぶとする学生に、特に肉用牛と乳用牛における生産獣医療に関する最新の情報を教授することである。我が国における生産システム、肉用牛と乳用牛における主要疾病とその防除法などについて講義する。</p>	<p>◎</p>	<p>○</p>	<p>△</p>	<p>△</p>
<p>臨床獣医学特別講義Ⅰ（日笠喜朗）</p>	<p>動物の内科的疾患の病態生理生化学並びに診断と治療法に関する基礎および臨床学的研究</p>	<p>本授業の目的は、小動物内科における最新の診断と治療情報を臨床獣医学分野での活躍を志す大学院生に教授し、この分野における高度な知識と問題解決能力を身につけさせるとともに、将来、内科分野におけるリーダーとして活躍できるような人材を育成することである。この目的に対して、動物の内科的疾患の病態生理生化学ならびにその診断法と治療法に関する基礎および臨床学的事項についての講義を行なう。特に、生活習慣病、老年病、循環器病の最新情報、特定難病や遺伝性疾患である心筋症、肥満、高脂血症、内分泌疾患、アトピー性皮膚炎について講義する。また、内科診断と治療薬としての<math>\alpha</math>-アドレナリン受容体およびイミダゾリン受容体作用薬の臨床的有用性、さらにそれら受容体変化と病気との関連を講義する。</p>	<p>◎</p>	<p>○</p>	<p>△</p>	<p>△</p>
<p>臨床獣医学特別講義Ⅰ（竹内 崇）</p>	<p>中枢および末梢神経系疾患についての電気生理学的研究</p>	<p>この授業の目的は、小動物および大動物の臨床検査における最新の獣医学情報を大学院生に提供することであり、この領域に対する問題解決能力を高度化することにある。特に、中枢神経系疾患の各種検査手技ならびに、その評価法と意義を正しく理解することは、正確な診断と治療方針の確立に不可欠な要素であり、この授業を通して中枢神経系疾患における機能的な評価法を教授する。さらに、小動物臨床医、大動物臨床医を目指す学生、あるいは既にその業務にある学生に対しては、画像診断等の評価法と本授業内容を相互理解することによって、さらに病態の理解を深めることに視点を置く。</p>	<p>◎</p>	<p>○</p>	<p>△</p>	<p>△</p>
<p>臨床獣医学特別講義Ⅰ（堀井洋一郎）</p>	<p>動物の寄生虫免疫学、消化管粘膜免疫学に関する臨床及び基礎的研究</p>	<p>この授業の目的は宿主と寄生虫の相互関係を理解し、寄生虫感染が直接あるいは間接的に宿主動物に引き起こす病害の発生機構を理解し、制御することにある。世界的に見ると家畜や伴侶動物の寄生虫関連の疾患は多く、またその一部は人獣共通感染症としても重要である。本授業は専攻学生に対して最新の知識と、これらを駆使して寄生虫関連疾患の本質へのアプローチの方法や能力を身につけるためのものである。</p>	<p>◎</p>	<p>○</p>	<p>△</p>	<p>△</p>

<p>臨床獣医学特別講義 I (奥田 優)</p>	<p>主に犬および猫の各種疾患に対する分子生物学的診断法・治療法を研究する</p>	<p>この授業の目的は、近年、小動物臨床の現場にも応用可能となっている様々な分子生物学的手法の原理と応用例を教授し、研究者・教育者・臨床家としての基礎的な知識を身につけることにある。前半では主に遺伝子・蛋白・細胞培養に関する分子生物学的な手法の原理とその応用例について、後半では小動物臨床領域ならびに人医学領域における最新の知見を紹介する。</p>	◎	○	△	△
<p>臨床獣医学特別講義 I (早崎 峯夫)</p>	<p>実験寄生虫学的手法に基づき、寄生体の感染機序および宿主の免疫学的感染防御機序について研究する</p>	<p>寄生虫の感染に対する宿主の免疫学的感染防御機序について講義する。大きく、組織内、消化管内、外部寄生虫に分けて解説する。寄生虫感染に対して生体の細胞性免疫応答、体液性免疫応答は複雑に関与していて、しかも寄生虫種ごとにその免疫学的機序は異なっている。このような外来異物攻撃反応が生体の正常組織にも大きな傷害を与えるため寄生虫感染における病態発生機序もまた異なってくる。このような複雑な宿主寄生体相互関係について学習する。</p>	◎	○	△	△
<p>臨床獣医学特別講義 I (佐藤 宏)</p>	<p>公衆衛生・動物衛生に関わる寄生虫の疫学的監視とその基礎生物学的研究</p>	<p>獣医寄生虫病学では、獣医臨床（コンパニオンアニマル・産業動物）と公衆衛生に関わる代表的な蠕虫症や原虫病について最新の情報を提供し、診断・治療と予防方針について理解を深める。また、近年問題となっている動物由来寄生虫症（幼虫移行症）の予防については、さまざまな社会的立場にある獣医師が今後連携し中心的役割を担っていくことが期待されている。この問題をとりまく現状と今後の対応を考える場を特に提供したい。</p>	◎	○	△	△
<p>臨床獣医学特別講義 II (三角一浩)</p>	<p>動物の外科疾患の病態を基礎および臨床獣医学的手法を用いて究明することによって、科学的根拠に基づく獣医外科診断・治療法の開発に役立つ</p>	<p>この授業の目的は動物の軟部および硬部外科分野における最新の獣医学情報を大学院生に教授し、自らが研究を進めていく上で必要となる外科的知識を発展させ、問題解決能力を高めることにある。将来動物臨床医を目指す、既に動物の診療に従事する、あるいは医学・獣医学・生物学関連企業に勤務する大学院生の興味を引き、臨床獣医学的研究を始める動機付けとなり、かつ臨床獣医学の進歩に貢献できる研究テーマを見出す機会となる話題を提供する。創傷治癒の分子メカニズムや、各器官の外科的トピック（特に骨軟骨疾患）を取り上げて解説していく。症例データ、臨床への実用化に向けた治験データや基礎研究データを紹介・解説することで、研究の着眼点や実験方法に関するヒントを与える。</p>	◎	○	△	△
<p>臨床獣医学特別講義 II (南 三郎)</p>	<p>獣医外科臨床における新しい治療技術の開発と特に創傷治癒メカニズムの解明に関する研究</p>	<p>この授業の目的は小動物の軟部組織および整形外科における最新の獣医学情報を大学院生に提供することであり、この領域にたいする問題解決に対する学生の能力を高度化することにある。この授業の目的として、小動物臨床医、大動物臨床医を目指す学生、あるいは既にその業務にある学生のみならず、獣医学のための新しい材料や器材の開発をしている企業をめざす、あるいは既に企業に就職している学生に対しても最新の知識を教授することにある。獣医師はあらゆる領域の臨床現場において、様々な問題と直面しており、とくに動物とオーナーはその運命を獣医師の知識と能力に支えられていることから、本授業は専攻学生に対して最新の臨床外科学を学び取る必要性に答えるものである。</p>	◎	○	△	△

<p>臨床獣医学特別講義Ⅱ (岡本芳晴)</p>	<p>動物の腫瘍に対する新しい治療技術の開発に関する基礎および臨床学的研究</p>	<p>この授業の目的は小動物の腫瘍における最新の獣医学情報を大学院生に提供することであり、この領域に対する問題解決に対する学生の能力を高度化することにある。この授業の目的として、小動物臨床医、大動物臨床医を目指す院生、あるいは既にその業務にある院生のみならず、獣医学のための新しい薬剤や器材の開発をしている企業をめざす、あるいは既に企業に就職している院生に対しても最新の知識を教授することにある。獣医師はあらゆる領域の臨床現場において、様々な問題と直面しており、とくに動物とオーナーはその運命を獣医師の知識と能力に支えられていることから、本授業は専攻学生に対して最新の臨床腫瘍学を学び取る必要性に答えるものである。</p>	◎	○	△	△
<p>臨床獣医学特別講義Ⅱ (田浦保穂)</p>	<p>獣医臨床における移植免疫・臓器保存・人工臓器・関節疾患・中枢神経疾患・免疫調整法等を含む臨床免疫学的研究</p>	<p>この授業の目的は、獣医臨床における移植免疫、臓器保存、人工臓器、関節疾患、中枢神経疾患、CTやMRIなどの画像診断、免疫調整法等を含む臨床免疫学および臨床外科学における最新の獣医学情報を大学院生に提供することであり、この領域にたいする問題解決に対する学生の能力を高度化することにある。この授業の目的として、小動物臨床医、大動物臨床医を目指す学生、あるいは既にその業務にある学生のみならず、既に企業に就職している学生に対しても最新の知識を教授することにある。獣医師はあらゆる領域の臨床現場において、様々な問題と直面しており、とくに動物とオーナーはその運命を獣医師の知識と能力に支えられていることから、本授業は専攻学生に対して最新の臨床免疫学および臨床外科学を学び取る必要性に答えるものである。</p>	◎	○	△	△
<p>臨床獣医学特別講義Ⅱ (山本芳実)</p>	<p>病気を含むあらゆる生命現象を細胞レベルで理解する事は現代生命科学の主要な流れになっており、受講学生は、本授業により、将来、研究や臨床を進展させるために必要な分子細胞生物学の基礎的な知識や考え方を習得する。</p>	<p>この授業の目的は生命現象の基本を細胞レベルで理解する事、さらに細胞を分子的基礎から理解する事である。</p>	◎	○	△	△
<p>臨床獣医学特別講義Ⅲ (上村俊一)</p>	<p>動物の繁殖生理に関する臨床内分泌学的研究および生殖機能障害の病態解明と治療法の開発</p>	<p>この授業の目的は動物の繁殖生理に関する臨床内分泌学的研究及び生殖器の障害の病態解明と治療法の開発を教授する。本授業は専攻学生に対して最新の獣医臨床繁殖学を学び必要性に答えるものである。</p>	◎	○	△	△
<p>臨床獣医学特別講義Ⅲ (中尾敏彦)</p>	<p>動物の生殖機能障害の病態を内分泌学的に解明するとともに、ホルモンによる生殖の人為支配技術を開発する</p>	<p>近年の生殖内分泌学の進歩はめざましく、動物のさまざまな生殖現象のメカニズムが解明されてきている。しかし、その一方で、生産性を重視した遺伝的改良と飼育形態の変化などにより、産業動物、特に乳牛の繁殖成績は世界的に著しく低下しており、この問題の解決が迫られている。本講義においては、主に、牛を対象に、生殖周期の内分泌学的メカニズムと、その知識に基づいて開発されているホルモンによる繁殖の人為支配の理論と実際を解説するとともに、多発する繁殖障害の病態内分泌とそれに対応する新しいホルモン療法の現状と今後の課題などを示し、生殖内分泌学の臨床的応用の可能性を検討する。</p>	◎	○	△	△



<p>臨床獣医学特別講義Ⅲ (音井威重)</p>	<p>動物の生殖工学（クローン、体外受精等）に関する基礎および応用的研究</p>	<p>近年の生殖工学の急速な進展は、動物が持つ未利用資源の可能性を大きく進展させている。本講義は、人為的なコントロール下での配偶子の様々な変化を解説するとともに、それに伴う基礎的・応用的研究を紹介する。特に本講義では、種々の生殖工学技術における開発過程の概説・理論・問題点について解説し、開発された生殖技術の必要性について共に考える。本講義は、専攻学生に対して最新の生殖工学を学び、臨床へと展開する知識を学び取ると同時に、生殖操作に伴う生命倫理に関する理解を深める。</p>	<p>◎</p>	<p>○</p>	<p>△</p>	<p>△</p>
<p>臨床獣医学特別講義Ⅲ (菱沼 貢)</p>	<p>動物の生殖工学（体外受精一胚移植）に関する基礎および応用的研究</p>	<p>この授業の目的は産業動物および伴侶動物の繁殖における最新の獣医学情報を大学院生に提供することであり、問題解決に対する学生の能力を高度化することにある。この授業の目的として、小動物臨床医、大動物臨床医を目指す学生、あるいは既にその業務にある学生のみならず、獣医学のための新しい材料や器材の開発をしている企業をめざす、あるいは既に企業に就職している学生に対しても最新の知識を教授することにある。獣医師はあらゆる領域の臨床現場において、様々な問題と直面しており、とくに動物とオーナーはその運命を獣医師の知識と能力に支えられていることから、本授業は専攻学生に対して最新の臨床繁殖学を学び取る必要性に答えるものである。</p>	<p>◎</p>	<p>○</p>	<p>△</p>	<p>△</p>